

いそげいそげ。独立を与えよう。コンゴがアルジェリアにならぬうちに独立を与えよう。…まず独立を与えてやることだ、独立を…（フランツ・ファノン『地に呪われる者』）

これは、ファノンが植民者の口をまねて記した箇所である。記述からわかるように、この植民者は複数の独立国家を越境する統治者でもある。またこの植民者は、「アルジェリア」といういい方において表現される何かを恐れている。そしてその何かが現実化するのを回避し、怖れを解消するために独立を語っているのである。脱植民地化のプロジェクトには、こうした植民者の怖れと保身が紛れ込んでいるのであり、したがって戦後世界における独立は、脱植民地化の経過点にすぎないのである。脱植民地化は、表面上の帝国の崩壊において終結させてはならないのであり、「植民地主義の中の帝国」という問いは、今も継続中なのである。あるいはそれは、誰が脱植民地化を語るのか、さらには植民地支配責任とは何かという問いでもあるだろう。そしてなによりもそれは、かつて大東亜の地図を書き、1945年以降突然に小さな島に自画像を作り上げた戦後日本の問題でもある。日本を考えると、今日においても依然として、植民地主義を問うことであり、脱植民地化のプロジェクトを検討する作業に他ならない。

*

「アフリカ史」および「帝国・植民地研究」の両分野で世界的な権威であるニューヨーク大学のフレデリック・クーパー氏による『植民地主義を問う—理論・知・歴史』（カリフォルニア大学出版局、2005年）がアメリカで刊行されて8年になる。以来、この書は英語圏で頻繁に参照され、植民地研究の今後の展開を考える上で重要な理論的文献であり続けてきた。ポストコロニアル論やサバルタン研究といった欧米の学問潮流が日本や韓国でも大きな影響をもっている昨今の状況を考えると、＜植民地近代性＞＜アイデンティティ＞＜グローバリゼーション＞といった重要概念に関するクーパー氏の議論は、東アジアにおいて植民地主義を再考するにあたってまたとない刺激となるであろう。第一部の基調講演では、『植民地主義を問う』で展開された議論に加え、ここ数年の植民地研究の動向、日本の植民地主義、2014年刊行予定の氏の新著などについても言及される予定である。

*

こうしたクーパー氏の議論が、日本帝国にかかわる脱植民地化へ問いであることはまちがいない。第二部では、いまもっとも力のある若手研究者である黄鎬徳氏、金杭氏、車承棋氏の三人を韓国から招聘し、脱植民地化の問いを日本帝国の問題としてより具体的に検討する。現在東アジアにおいて日本を研究する者は多い。そしてその多くの人たちが、日本研究を、「植民地主義のなかの日本」として行う。それは研究の前

提であり、出発点なのだ。対して日本の日本研究では植民地主義を、戦前の帝国史や戦後の在日研究、あるいは外国史研究として外部化し、限定している。そこには日本の日本研究に潜む、上に記した植民者の怖れと保身があるだろう。また植民地主義が主権的国家を前提にした政治・経済・文化の区割りに収まりきらない統治であるならば、この「植民地主義のなかの日本」は、何を政治といい何を文化というのかという理論的問いでもある。すなわち、政治を構成する公の空間が構成されていないところに植民地主義があるとすれば、国民国家の政治制度を想定した研究区分自体が問われなければならないのだ。招聘する三者とも、実証史学と同時にポストコロニアル理論、国家論、美学理論をはじめとする理論的枠組みに極めて精通している。そしてこの理論的側面は、上記した学知の領域区分をいかに横断するのかという問題と深くかかわっているのである。

*

第三部では二つのセッションを受けて、脱植民地化について総合的に検討する。報告者に加え、藤井たけし氏、金友子氏、永原陽子氏らとともにラウンドテーブルを構成し、「植民地主義のなかの帝国」という課題にかかわる複数の問いを確認し、徹底的に議論する。(シンポジウム開催にあたってのチラシより)

趣旨説明

富山一郎

本日は皆さま、ようこそお集まりいただきましてありがとうございます。最初に私からシンポジウムの趣旨を3点に渡って説明させていただきます。事前に配布したチラシの文章と重なる点もありますが、イントロダクションとしてお聞き願いたいと思います。

まず今回のシンポジウムで掲げられた、「植民地主義のなかの帝国」という表題についてです。この表題の含意は、植民地主義は世界を構成する重要な基軸であったし、今も、あり続けているというところにあります。こうした問題は、いわゆるポストコロニアル・スタディーズと重なりますが、表題にある帝国という言葉の含意は、植民地主義が世界を構成している以上、たとえ帝国自身が勝手にその崩壊を宣言し植民地を手放したとしても、依然として植民地主義は続いているということも含意しています。歴史の軸は、帝国にあるのではなく植民地主義にあるのです。こうした「植民地主義のなかの帝国」は、時には植民地支配にかかわる責任や補償、あるいはレイシズムや移民問題といった個別

イシューや、さらには一般的に見えるセキュリティや治安管理等という形で表現されることもあります。それらはほんの一部の表れであり、植民地主義はいわば批判すべき現実世界として今もなお、あたりまえのように存在し続けています。

そして重要なことは、こうしたところから帝国を考えた時、その帝国は類型や地理的区分、あるいは時期区分において括りだせるものではないということです。むしろ括りだすことにより、現実の植民地主義が切り縮められ、隠されていくことがあると考えます。あえていえば帝国から主権的な国民国家へという道筋それ自体が、現実内に在する植民地主義の否認の構図であるということにほかなりません。またこの点は、その国家が社会主義国家であっても残念ながら同様であると、とりあえずいえるでしょう。したがって帝国を問題にするには、帝国から植民地主義を論じるのではなく、植民地主義が基軸として存在する現実から帝国を再度、浮かび上がらせる作業が必要となります。ここでは、複数の帝国の重なりや、帝国を横断して蔓延する統治権力が問題になるでしょう。それはまた、脱植民地化にかかわる政治が、主権の回復あるいは獲得ということで終了する訳ではないということとも深く関係します。これが第1の要点です。

第2は、政治の発見ということです。現実の中に深く内在する植民地主義をいかに問題にしていくのかという問いを立てた時、帝国から国民国家へという道筋が植民地主義の否認の構図である以上、国家主権において構成される政治空間それ自体が問題になります。つまり乱暴に言えば、そこでは政治という領域設定それ自体が、植民地主義と結託しているわけです。したがって求められるのは、「政治」という言葉をつくり直していく作業とともに、従来の政治空間の外、即ち非政治的領域にいかん政治を見いだしていくのかということになります。文学や非政治的にみえる言語行為、美学的な領域、あるいは毎日の日常空間なども再度、別の現実への起点として確保していくことが必要になるわけです。

ただ注意すべきは、それは文学も政治だということではありません。政治という領域それ自身が問われているのですから、この言い方だとただ否認の構図が拡大しただけで、開いたふたを素早く閉じてしまうこととなります。これはよくある陥没です。あるいは既存の政治の構図を、図像や文学などに発見して、新しい政治を発見したと勘違いすることも同じ陥没です。求められているのは、単に文学は政治だといえ変えることなく、政治領域それ自身を書き換えるような、具体的なことに即した丁寧でかつ理論的な作業ではないでしょうか。またあえていえば、具体性が個別実証になり、結果的に全体の提喩になってしまうためには、理論的作業は不可欠なのです。そしてこうした作

業において初めて「脱植民地化」というプロセスが浮かび上がると考えます。

第3に、こうした脱植民地化にかかわる政治空間あるいは政治の想定は、そのまま学知の問題に跳ね返ってきます。即ち脱植民地化の政治を研究する作業においては、その内容やテーマの問題ではなく、政治という問いの立て方自体が、まず問われなければならないこととなります。何を政治といい、何をそう呼ばないのか、重要なのは政治の内容ではなく、政治と非政治のその区分の仕方に問題があるわけです。そしてこの区分は、研究分野ということに深く浸透しています。したがって、誤解を恐れずにいえば、分野を保持する個々の学会等において、当該領域の課題を設定し、解答を求めるとよくある思考方式が、何を前提にして解答を見いだそうとしているのかということが問われなければならないということです。言い換えれば本シンポジウムでめざしたいのは、これが答えであるということよりも、すぐさま答えが見つからない多くの問いを立てることであり、その問いを、どう表現するのかということこそが重要になります。

最後にシンポジウムの構成について説明させていただきます。最初にニューヨーク大学のフレデリック・クーパー（Frederic Cooper）さんに世界史的立場から植民地主義への問いを提示していただきます。第二部は「植民地主義のなかの日本帝国」ということで報告を受けたいと思います。最初に聖公会大学校（2014年2月より朝鮮大学校）の車承棋さん、2番目に成均館大学校の黄鎬徳さん、3番目に延世大学校の金杭さん。この3人に報告していただきます。

その後、徹底的に問いを出していく作業に入ります。これが第三部になります。最初の発言者として韓国歴史問題研究所研究室長で成均館大学校の藤井たけしさん、立命館大学の金友子さん、京都大学の永原陽子さんに、それぞれ話をしてもらい、そのあと場を会場にも開いて話を進めていきたいと思います。また休み時間に質問表を配りますので、フロアからも積極的に議論に介入していただきたいと思います。尚、今日は会場にインターネットテレビが入っております。参加者の方を写すことはありませんので、ご了解ください。

第一部 基調報告

司会 水谷智

フレデリック・クーパー氏をここ同志社大学に招聘できましたこと、大変嬉しく思い

ます。クーパー氏は現在、ニューヨーク大学歴史学科教授で、ご専門は植民地研究およびアフリカ史です。長年、両分野で学界をリードしてきた第一人者ですが、前者に絞ってその業績を簡単に紹介させていただきます。

欧米ではここ30年ほど多くの歴史学者や人類学者が植民地研究に取り組んで来ましたが、もっとも頻繁に参照される文献として有名なのが、氏がミシガン大学でかつて同僚だったアン・ローラ・ストーラーと共同編纂し、1997年に刊行された論集、『帝国の緊張—ブルジョワ世界における植民地文化』[*Tensions of Empire: Colonial Cultures in a Bourgeois World* (California University Press)]です。特にふたりが共同執筆した序論「本国と植民地：研究指針の再考」(‘Between Metropole and Colony: Rethinking a Research Agenda’)は、本国と植民地の関係を分けて考えるのではなく、同一の分析フレーム内で捉えて研究すべきだという方向性を打ち出し、多くの研究者に影響を与えて来しました。

その後、2005年にはクーパー氏は『植民地主義を問う—理論・知・歴史』[*Colonialism in Question: Theory, Knowledge, History* (California University Press)]を刊行し、すでに頻繁に参照される文献となっています。この本の大意は本日の講演で紹介されますが、国民国家論やポストモダンに影響を受けた近年の植民地研究の理論的境界を指摘しながら、本国と植民地を内包する帝國的空間において、支配者と被支配者がいかに<差異>をめぐる政治的に争ったかに着目する重要性を打ち出しています。氏が批判するのは、近代性モダニティーおよびその政治的具現化としての国民国家ネーション・ステートの普遍的重要性を前提としてその内在批判に重きを置く傾向です。こうした氏の立ち位置は、彼がアフリカをフィールドとしていることと深い関係があります。植民地近代性や国民国家を<脱構築>することは、例えばインドの植民地化および反植民地主義を論じるにあたっては一定の意味を持つ一方、独立後の「国民国家」が絶え間ない内戦や恒常的な経済不振に苦しむアフリカでは難しいと論じます。

氏はむしろ、被支配者が支配者にたいして植民地主義の責任を問う歴史的モーメントが独立期以前に帝國的な枠組の内部に存在したことに着目する重要性を説きます。クーパー氏の最新の研究は、それをアフリカとフランスの関係を例に実証的に論じるもので、『帝国とネーションのあいだの市民権：1945 - 60年におけるフランスと仏領アフリカの再構成』[*Citizenship between Empire and Nation: Remaking France and French Africa, 1945-1960* (Princeton University Press)]として来年刊行される予定です。この本の内容は、今日の講演の最後の部分で触れられる予定です。

本日の講演を依頼する際、欧米の議論も踏まえつつ、東アジアの植民地主義についても比較と関係性の視座から言及していただきたいと依頼しました。我々の要求に快く応えてくださったクーパー氏に心より感謝いたします。

(フレデリック・クーパー論文参照)

第二部 植民地主義のなかの日本

司会 富山一郎

富山

先ほどのクーパーさんの話を引き継ぐ形で、議論を進めたいと思います。先ほどの基調報告では、いろんな地域の話が出てきましたが、第二部では日本帝国に引きつけながら問題を立ててみようと思います。しかしそれは、地域を限定するというものではありません。むしろクーパーさんの世界史的視野を日本帝国に引きつけて考えるということです。全体としての世界史と、地理的に区分された地域ということではないということです。このあたりは、最後の総合討論でも議論できればと思います。

まず第二部で議論したいことは、帝国という設定をどう考えるかということです。1945年、日本帝国は軍事的に敗れ、戦後が始まったという一つの中心的な物語があります。あえて乱暴に言えば、それまでは地図に描いていた大東亜共栄圏を自分の領土だと勝手に言い張っていたのに、今度は突然、これも一方的にそこは外国だといい、小さな列島が自分の領土だとみなすような不思議なことが、1945年をまたいで起きたわけです。しかしこの「日本帝国から戦後日本へ」という道筋の中で、言い換えれば地政学的な空間認識の突然の収縮の中で、何が隠されていったのか、何が議論されないまま放置されていったのかを第二部で考えたいと思います。

こうしたテーマについては、〇〇という問題が戦後に残されているというような言い方もできるかもしれませんが。しかしこの個別イシューを考える際に、すでに戦後という時間と戦後日本の国民国家が前提にされてはいないでしょうか。すなわち原理的な話をすれば、戦後の国民国家というもの自体に何かしら植民地主義を継続させるモーメントが含まれていないかという問いです。あるいは国民国家を前提にした市民や民衆という主体概念や政治空間それ自体が、植民地主義を継続する何かしらのモーメントを含んで

いないかということが問いとしてあります。

こういうことを考え出したきっかけの一つに、この10年くらい韓国にいて日本の話、あるいは沖縄の話をしてきたことがあります。そこで出会ったのは、日本の中での日本研究と韓国でなされている帝国日本の研究の非常に大きなギャップということでした。すなわち戦後日本の研究は、1945年で世の中が変わったかのように描くけれども、植民地だった場所においてなされている帝国日本の研究においては、1945年でとつぜん植民者が国民に変わったわけではない。あえていえばそれは、帝国に終わりを告げるのは誰なのかという問題です。韓国にたびたび行くなかで、このあたりを徹底的に議論していかなければいけないだろうと思うようになったわけです。

そうした中で今日、お呼びした3人の方ですが、それぞれのご研究については日本語で読めるものもたくさんありますので、ぜひ読んでください。やや乱暴に言えば、3人の方に共通しているのは「支配を語りながら可能性を語る」ということを遂行されている点です。それは、ここに可能性があると分けし限定して描くのではなく、徹底的な支配を書く作業が、同時に可能性を書く作業につながっているということです。これはすごく魅力的なところですよ。

では、どうしてそういうことができるのか。これも乱暴なまとめですが、あえていえばそれは、身体ということに徹底的にこだわることでもあります。身体において支配を語れば、それはある種の暴力的側面が強調されるわけです。主体という言い方が、呼びかけや言葉において構成される側面が強いとすれば、身体に注目することは暴力的な側面、植民地状況の暴力に徹底的にこだわることになります。そしてそのことは同時に、主体の外にひろがるある種の可能性を指摘することにもつながっているのです。身体性は、支配における暴力の問題を浮き上がらせると同時に、主体においては議論できない可能性を確保する訳です。ではこの植民地主義の暴力的側面を受け止め、かつ市民や国民といった主体に還元されない脱植民地化を担う身体の領域をいかなる言葉で獲得すればいいのか。これもまた、これから話をさせていただく3人とも焦点を据えている点です。

それでは今から3人の報告を聞いていきたいと思えます。最初に車承棋さんに「帝国のアンダーグラウンド」という表題でお願いします。

(車承棋論文 参照)

富山

ありがとうございました。車承棋さんは、「グラウンド・ゼロ」という言葉で、生産力の構成要素、すなわち1ミリの漏れもない生産力の構成要素としての人間のありようを議論の基底にしています。この「グラウンド・ゼロ」から開始される政治は、どのようなものでしょうか。市民や主体、あるいは主権において構成される政治が剥奪された「ゼロ」において何を政治として構成して行けばいいのでしょうか。この点にこそ、脱植民地化の政治の出発点があるという訳です。そして車承棋さんは、朱仁奎と李北鳴を主にとり上げながら、政治の可能性を考えようとしています。すなわち「グラウンド・ゼロ」を既存の政治の中で代表すること、と同時に「ゼロ」において剥き出しになる身体が媒介となつてつながりを生み出していくこと、この二つの事態が交錯する中で政治を探るわけです。そこで据えられているのは、言葉の問題です。あらゆる既存の政治が剥奪された「グラウンド・ゼロ」から言葉が始まるその瞬間を、いかに奪い返すのか。報告ではこの心踊るような表現が出てきました。そこに可能性を確保しようとするわけです。言葉として。

そしてとりあえずその可能性は、二つの方向で封じられていったことが指摘されたと思います。一つは植民地主義という認識です。この場合、植民地主義というのは、奪い返すべき起点を、予めサブ・ジャンル化し、植民地という地政学におしこめていくプロセスです。これは地理学的地域という問題でもあり、また解放後の冷戦体制ということでもあるでしょう。もう一つは社会主義。この生産の構成要素としての身体の可能性は文字通り、社会主義の問題でもあるにもかかわらず、社会主義建設において生産の身体はそのまま継続されていく。この二つの方向で、この可能性が封じられていくように思いました。そしてだからこそ、奪い返すのだという話です。

最後に一点だけ注意を喚起したいのですが、ここで述べられている「資本-国家コンビナート」の日本窒素は、戦後、新日本窒素になりました。それは水俣病を引き起こした、あの会社です。資本は、まったくもって、1945年で切断されているのではないのです。その点も討論で議論できればと思います。

次に黄鎬徳さんに「解放と概念、誓う肉体の言語」という題で話をしてもらいます。よろしくお願いします。

(黄鎬徳論文 参照)

富山

ありがとうございました。一つ目の車承棋さんの議論と重なってくる話だったと思います。あえて乱暴に言えば、言語化される瞬間をいかに奪い返すのかという文脈の中で、この新語の時代、辞書の時代、そして「ウリマル」を考えようとされていると思いました。この黄鎬徳さんが示された膨大な言葉のリストから伝わってくるのは、感覚的な言い方をすれば、狂おしいまでに言葉を獲得しようとする、希求です。同時にそこを凝視し続けようとする黄鎬徳さんの、もう一度出発点を再設定しようという強い思いも伝わってきます。

いろんな言葉が出てきました。「党の言葉」、「群れの言葉」、それに対して「日常の道具」。概念と闘争がほとんどイコールになるような「闘争が概念であり、概念が闘争になる」ような言葉の水準に、いかに止まり続けるのか。ドキドキするような問いです。あるいはそれを、主権的政治とは異なる「一般的知性」の問題ともおっしゃいました。圧巻です。ですがこの狂おしいまでの言葉への希求が、次第に消散していく事態が進行してきます。そしてこうした「歴史」を見据えながら脱植民地化を担うのはいかなる言葉なのかと問い続ける黄鎬徳さんは、新語の時代、辞書の時代を注視し続ける訳です。そのような黄鎬徳さんにとって、今日までの「歴史」は、まだ何も始まっていない停止した時間なのかもしれません。

報告を聞きながら、日本における戦後という時間について考えていました。戦後を言葉のありようとして確保し、そこから歴史を開始しようとした人がいました。今すぐ思い起こすのは鶴見俊輔が1946年に書いた文章で述べた「言葉のお守り的使用法」という問題です。黄鎬徳さんの報告に無理やり引きつけていけば、言葉というものを、文字通りコンテキストではなく、それぞれの「日常の道具」の中で考えない限り、戦後を担う言葉は見つからないと鶴見は考えていたのではないかと思っています。そのような鶴見にとっても戦後日本は、まだ何も始まっていない壮大な失敗なのかもしれません。

最後に金杭さん。「規範と事実のはざままで」という題で報告をお願いします。

(金杭論文 参照)

富山

ありがとうございました。報告で浮かび上がったのは、戦後日本の始まりが、なにをいかに統制していったのかということでした。すなわち帝国の崩壊の中で、「アンダーグ

ラウンド」が前景化し、言葉を奪い返す試みがなされる中で、その解放の始まり、いいかえれば脱植民地化の始まりを戦後という時空間に統制していくプロセスとでもいうべき事態もまた開始されるということです。すなわちそれは戦後の日本という問題です。それこそが、事実と規範という概念的には対立するように思える二つの領域に挟み込まれるように登場する、主体としての日本なのでしょう。金杭さんが小林秀雄と丸山真男を通してうかびあがらせたのは、まさしく脱植民地化のプロセスを回避することにおいてはじまる戦後日本の姿といえるのではないのでしょうか。

それはやはり戦後それ自体の問題であり、最初にも述べましたが、〇〇問題という形で限定的に語るができることではありません。植民地主義の中の帝国という問いの中で日本を考えるということは、この脱植民地化の可能性を回避し陶冶するなかで始まった戦後それ自体を問題化することであり、あえていえば、再度その始まりを確保し、やはり歴史を奪い返す作業こそがもとめられているといえるのでしょうか。

ここまでで一応、第二部の「植民地主義のなかの日本」は終わりたいと思います。休憩後、お配りしている質問表を受け付けたいと思います。今までの議論を踏まえて第三部の討議の時間に入りたいと思います。ありがとうございました。

第三部 総合討論

司会 板垣竜太

板垣

4本の中身の濃い報告を聞いていただきました。すべて植民地主義にかかわる話で、「日本」とか「イギリス」という枠におさまらない、グローバルな広がりをもった議論が展開されたと思います。今回の企画の論文をあらためて並べてみますと、ある1つの輪郭を浮かび上がってくるように思います。それをさらに浮かび上らせるために、3人の討論者をお迎えしております。

3人の討論者の話を聞く前に一言だけ申し上げておきます。企画の成立経緯について内情を言いますと、実はこの企画はもともと2つの別の企画でした。第一部の司会の水谷さんとこの後討論してくださる永原さんと板垣の3人で、クーパーさんが北海道に数カ月来ておられる機会を利用して、ぜひ同志社に招待してコロニアリズムについての講演企画をしたいと話を進めていました。それと同時に、富山さんが第二部の3人の韓国の

若手研究者を呼んでゆっくり議論をしたいという企画を進めていました。それぞれ日程を調整したところ、どちらも10月26日になっていたことに、後から気づきました。同じ「コロニアリズム」というキーワードで、同じ同志社という場所で、同じ日に、別々に集まりをもつのはもったいないということで、いっそのこと「くっつけてみた」というのが正直なところでした。くっつけてみると、結果的にいろんな接点も出てきたと考えます。この総合討論でそれがまとめられるかどうかは定かではなく、「問い」がどん増えてくるだけの可能性もあります。クーパーさんのタイトルに「More Questions」というのがありますように、もっと問いが出てくるような討論になるかもしれません。それもそれで大事なことだと思っています。

それではコメントを皆さんにお願いします。まずは藤井たけしさん、成均館大学校史学科BK21研究教授で朝鮮現代史を専攻しておられます。それでは藤井さんからよろしくお願いします。

藤井たけし

はい、今紹介にあずかりました藤井たけしです。いま、非常に多くの問題が提起されたのですが、わたしがそれぞれの報告について直接的にコメントするよりは、別の問題、報告のなかでも少しずつ触れられてはいたものの、きちんと言及されていなかった部分について問題提起をする形でコメントをしようと思います。

今日の集まりで大きなテーマとして出されている脱植民地化とは、植民地から脱してどこに向かうことなのでしょう？「植民地化以前」の状態に戻ることが目標なのでしょう？韓国で脱植民地化が「光復」と呼ばれるように？

しかし歴史学者ヴィジャイ・ブラシャドが「第三世界」が場所ではなくプロジェクトとしてあったことを想起させているように、脱植民地化とは未来への投企に他なりません。ただこの「未来」を見失っていく過程のなかで第三世界は地理上の空間を表す概念となり、脱植民地化はすでにあったものを取り戻す行為とみなされるようになってきたのだと言えるでしょう。脱植民地化について歴史的に考えると、さしあたりこの過去の中の未来について考えることなのではないかと思っています。

そしてかつてその「未来」の一つとして示されていたものが社会主義です。しかしソ連の崩壊など「現実社会主義」の没落ととも社会主義を未来の可能性として提示することは少なくなり、反植民地闘争の歴史について語る際にもそこに含まれていた社会主義というビジョンについてはできるだけ触れずに済ませようとする傾向があるように思

われます。しかし歴史的経験として社会主義を捉え返す作業は脱植民地化について、少なくとも歴史的に思考する際には不可欠のものであるでしょう。

この点と関わって、クーパーさんが、ソ連が「後の多国間的な政治形態のモデル」となるものであったことを指摘している点は重要です。ただこの点はソ連がロシア帝国を引き継いだということにおいてではなく、国際共産主義運動の歴史のなかにおいて吟味される必要があるでしょう。世界的な反植民地闘争を指導する機関としても機能していたコミンテルンの歴史が示しているものは、単なる帝国の遺産のようなものではないように思われます。むしろその次の部分で指摘されている、帝国への抵抗が必ずしも国民国家の形成を目指すものではなかったという部分と関わって考えられなければならないでしょう。評議会（ソビエト）社会主義共和国連邦という、固有名詞を含まない国家の存在は、固有名の空間である植民地主義の空間とは明らかに異なったものを示していたことを想起しておく必要があるのです。

車承棋さんの扱った興南での太平洋労組の活動についてわたしたちが具体的に知りうるのは、その労組に加わっていた日本人労働者、磯谷季次の遺した回顧録のおかげなのですが、この「グラウンド・ゼロ」のなかで朝鮮人労働者の闘いに日本人労働者が加わりえたという事実は、社会主義のもったある種の可能性を示しているように思われます。磯谷のみならず、1930年を前後した時期の朝鮮における労働運動や共産主義運動の検挙記録を見ますと日本人の名がところどころに出てくるのですが、植民者である日本人が植民地において被植民者の運動に加わるという一種の越境が可能となった背景の一つには、コミンテルンの悪名高き「階級対階級」戦術が存在しています。あらゆる政治的な要素を階級へと還元するこの路線は様々な弊害を生み、1935年の人民戦線戦術への転換により克服されたとされています。もちろんこの階級対階級戦術がある意味で政治の領域を破壊するものであったことも確かなわけですが、興南のようにすでに既存の政治領域とは異なった空間が形成されてもいたことを考える時、人民戦線という、既存の政治領域と妥協した「現実主義的」路線への転換は、「グラウンド・ゼロ」において生み出されつつあった地下世界を再び民族別に整序するものであり、脱植民地化を「民族独立」へと置き換えていくものにほかなりませんでした。ここにあるのは「未知の階級闘争」への恐怖であり、解放直後に興南の労働者たちに国民としての主体化を要求することとなるのも、ある意味ではこの恐怖の延長線上にあるのだと言えるでしょう。ミシェル・フーコーは社会主義的な統治性は存在しないと指摘していましたが、この言葉はこのような後退の結果に関わった指摘であるように思われます。

このような傾向は、黄鎬徳さんの扱われた新語辞典の編纂からも同じように読み取れます。新語辞典の編纂において、より積極的であったのは社会主義者たちだったわけですが、解放によって噴出した大衆の動きを解釈し分類し指導するために辞典が必要だったのであり、とりわけ第二次世界大戦を「偏狭な国家主義に対する国際主義の勝利」と定義していた朝鮮共産党指導部にとっては解放直後の混沌（それが新語の氾濫としても現れたわけですが）を「国際路線」に沿って整理することが必要でした。新語辞典の多くが1946年の春に刊行されているのは、まさにその時期に朝鮮問題の解決のための国際的な合意に基づいてソウルで米ソ共同委員会が開催されていたためにほかなりません。国際的なレベルで自分たちの未来が決せられるという状況の中で、国際的な思潮を理解させ順応させるべく辞典は編纂されているのです。

社会主義が一種の捕獲装置として機能してきたことは明らかでしょう。とすればこれを捨て去ってしまうべきなのでしょうか？実のところ脱植民地化の可能性を逸脱といった形象によって示すことはさほど難しいものではないように思われます。しかし帝国と対峙する「虫けら」がどのように群れをなすのかという問いを投げ去ってしまうわけにはいきません。現実の脱植民地化の問題を考える時、社会主義という歴史的経験の意味をどのように捉え返すのかは依然として重要な問いであるように思われます。こういった点についてともに議論ができればと思います。以上です。

板垣

ありがとうございます。社会主義という今日の一つの隠れたキーワードを浮かび上がらせてくれるコメントだったと思います。

次に金友子さんのコメントです。現在、立命館大学国際言語文化研究所で客員研究員、嘱託講師をされております。エスニシティ研究、ジェンダー研究をされています。よろしくお願いします。

金友子

コメントを日本語でいいます。それは相当の情けなさがあるのですが、今日の問題意識に絡めていえば脱植民地化の問題とかかわるだろうと思うので、これについては後に言及したいと思います。

クーパー先生、黄鎬徳先生、金杭先生、車承棋先生の発表を興味深く聞かせていただきました。広範囲にわたる発表の一つひとつにコメントするのは専門外の私にとっては

荷が重いので、私の問題意識にぶつけるという形でコメントに代えさせていただきます。

私は長らく植民地主義の問題に関心をもってきました。一つは継続する植民地主義の問題です。もう一つは脱植民化の問題です。とりわけ脱植民地化の問題でも、在日朝鮮人にとっての脱植民地化とは何かという問題です。継続する植民地主義に関しては私が暮らしている日本の状況、具体的には1945年以降の在日朝鮮人に対する処遇の問題や日本軍慰安婦の問題など、未だに「清算」されていない日本の植民地主義の問題があります。この二つは日本の植民地主義を象徴する最たるものといえますが、とりわけ植民地を肯定したい人たちにとっては認めがたい、受け入れがたいものになっていると思います。

脱植民地化については、とりわけ私自身が在日朝鮮人3世であることによります。継続する植民地主義という問題、あるいは脱植民地化の問題、二つの問題は日本の脱帝国化の問題とも言い換えることができるでしょう。実は今日のシンポジウムのタイトルについて不思議な感覚を覚えました。「植民地主義のなかの帝国」「帝国のなかの植民地主義」ではないところが引っ掛かったのです。帝国が植民地主義を実践していくこと、つまり自分の領土ではないところを植民地として繰り入れていくこと、さらにその領土は植民地の本国よりも劣位におくという序列をつくることによって帝国なるものが形成されていくわけであって、その意味で帝国のなかの植民地、植民地主義、あるいは植民地帝国という言い方が一般的にされる。しかしながら植民地主義のなかに複数の帝国をおいてみるとどうなるのか。しかもそれを植民地主義の継続ないし脱植民地化の問題とあわせて考えると、どういうものが示唆されるのか。これらはもっぱら私の問題意識にかかわって、ということですが、発表全部をあわせても見えがたい感じがしました。何かしらこの議論を通して見えてくることを期待したいです。

脱植民地化の問題について。在日朝鮮人の解放について断続的に考えてきたのですが、日本では朝鮮人が朝鮮人のままで暮らすことが困難な状態です。近年のヘイト・スピーチの噴出はいうに及ばず、ずっと有形無形の抑圧にさらされてきています。が、そういう抑圧が、すでに抑圧と感じられないような状態に今、あると思っています。在日朝鮮人がさらされている抑圧はとても言語化しにくい。ここで、私が感じるができないのであれば、別に問題ないじゃないかということもできるのですが、そうはいいたくない、いえないような何かがあると思います。私が私らしくありのままの私でいることが難しい日本社会の中で、すでに何が、ありのままの私なのか、何が真の朝鮮人なのかというの、すでにわからない。もちろん真の朝鮮人などというものは想像の産物にしか

すぎないといえるでしょうし、現在はそういう言説の方が力をもっています。しかしそういういいきってしまったていいのか。この問題は黄鎬徳先生の発表されたウリマルの問題にも、もしかしたらかわるのかなと思います。何かを取り戻す、私たちの自分の言葉を取り戻すといった時に、そこにあるのは剥奪感、もとある状態から何か奪われているという感覚です。それを取り戻す時に、自分と、それを奪った敵対物に加えて第3の第4の勢力が介在する。その問題に言語の政治学の側面からアプローチされていたと私は受け取りました。起源たる何かが、たとえあくまで想像されイメージされて後に創造された構築物であると、とりあえずは今という時間軸から、あるいはさまざまな学問的な蓄積からいえるかもしれませんが、起源たるものを創造すること自体が本質主義にとられることであるともいえるかもしれません。私が問題だと思うのは、例えば在日朝鮮人の場合を考えると、純粋な起源としてたどることができないような異種混交の状態を模索され、あるいはプロセスを経て獲得されたものであっても、本質的な民族と見做されるようなものを求める方に傾くと、たとえそれが構築されたものであったとしても本質主義だと批判され、他方でコスモポリタン、ハイブリッドのあり方に向かえば、それは称揚される、そんな状況です。

しかしながら私は一見、本質主義に向かうかのような自己の構築の仕方に、何かみるものをえるべきだと考えています。植民地主義によって植えつけられたものが、すでに引き剥がすことができないぐらいに自分を構成してしまっている中で、脱植民地化はどういうふうな構想できるのか、と。今日は肉体という言葉を使われている先生がおられました。肉体に関する何事かに問題意識をもって発表されたことには重要な意味があるかと思っています。

今日のコメントを韓国語でいうのか、日本語でいうのかという話ですが、事前に打ち合わせがありまして韓国語でやるということになったのですが、結局、私は日本語でしゃべることになってしまいました。なぜか。それはその方が楽だからです。だけど韓国語で私がしゃべらないことに関して、私はちょっと情けない気持ちを抱いてしまうのです。日本語の方が楽だという事実と、それを悲しいと思ってしまう心情がある。すごくナイーブな話かもしれませんが、ここに何か植民地主義がもたらした取り返しのつかないものがあるのではないかと考えることも可能かと思えます。それはなかなか言語化できないのですが、脱植民地化という時に、人間のいかなる状態を想像すればよいのかを考えるにあたって提起しておきたい問いです。

最後にもう一つだけ付け加えたいことがあります。植民地主義をどうとらえるかにつ

いてです。金杭さんが最初にいわれたことに、とても違和感を覚えました。植民地主義、植民地統治の定義について「それは異民族に対する支配という問題ではない」と断言したところが非常に引っ掛かったのです。主体なき権力のように、主体なき植民地主義というのを考えられるのか、あまりに抽象化しているのではないか。なぜかという、支配と被支配の関係を考えることは非常に重要だと思うからです。その過程で異民族や自民族がつくられていったもののだとしても、ある集団、ある民族の他の集団や他の民族に対する支配という観点を除いて植民地主義をとらえることには非常にあやうさを感じました。皆さんはいかがですか。以上で終わります。ありがとうございました。

板垣

ありがとうございました。「植民地主義」というものが何やら過去のものではなく、今まさにこの場にも植民地主義の歴史は刻まれているということ、自らが語る言葉に即してもお話をいただきました。

「植民地主義のなかの帝国」というタイトルについて司会から申し上げておきます。2つの企画が一緒になっていく過程については既に述べました。実はもともと富山さんの企画していたシンポジウムのタイトルが「植民地主義のなかの日本」というもので、本日の第2部のタイトルにあたります。この企画をクーパーさんの講演とくっつけた際に、「日本」が「帝国」に置き換わったという経緯があります。そこで「植民地主義のなかの日本」「植民地主義のなかの帝国」という表現にこめられた含意は次のようなものです。これを逆にして「日本のなかの植民地主義」と言う場合、植民地主義から逃れた「日本」なるものがどこかにある、純粋でよい正常な「日本」があって異常な「植民地主義」がそれとは別にあるというニュアンスもともとすと持ってしまふ。そうではなくて、植民地主義的であるところの日本、どうしようもなく植民地主義から逃れられない帝国というものを解剖する。帝国の非植民地主義的部分というのを取りだし得るような議論ではなく、どうしようもなく植民地主義のなかにある帝国の問題を突き詰めていきたい、という観点からの企画であると私自身は理解しております。以上、企画者の方から申し上げます。

もう1人のコメンテーターの永原陽子さんです。3月まで東京外国語大学で4月に京都大学に移られました。来られてすぐに、本日の企画について相談したりもしました。ご専門は南部アフリカ史、植民地研究です。2009年に『「植民地責任」論』を出されて、比較史的な観点から植民地支配の責任、脱植民地化は何であったのかということに関して

研究をしてくられています。それでは永原さん、お願いします。

永原陽子

アフリカの南の方の歴史を勉強しておりますが、日本にいてアフリカの歴史を勉強しているということで、今日はクーパー先生のお話と韓国の3人の方のお話の橋渡しするようなことができればいいなと思っていたのですか、それはなかなか難しそうです。その難しさは比較すること自体の難しさもありますが、もう一つはあとの3人の方のお話が、大変具体的な緻密なお話であったからです。日本で植民地の研究をする場合、日本と東アジアを中心とするアジア諸地域との関係に関してはたくさんの研究者がいて、研究の蓄積も分厚いので、皆さんが共有している知識や理解を前提にして議論することができますが、アフリカのように日本ではほとんど研究している人がいない分野では、常に導入的な話をしないことには議論が成立しません。そのように研究状況のまったく異なる分野の話をつなげるのは大変難しいことです。今日もそういう難しさを感じたのですが、そこを何とか無理矢理にでも橋渡しして、世界史的にものごとを考えるにはどうしたらいいのかという点から、私自身が取り組んでいることの関係でお話してみたいと思います。

最初に欧米の植民地主義の問題と日本の植民地主義の問題を比較することの難しさということについてですが、私は植民地主義や脱植民地化の比較に取り組む中で、最近、韓国にいて話をする機会がときどきあります。2、3年前、あるシンポジウムでは、植民地支配の責任、植民地支配の過去の清算をどうするのかというのがテーマで、日本と韓国の間の問題と、アフリカの植民地とヨーロッパの旧宗主国との間の問題とを比較するような話をしました。そこで一人の参加者が一国際法の専門家ですが、「アフリカと韓国を同列において話をしてもらっては困る」という意見を述べられました。「日本が朝鮮を植民地化した時に日本と朝鮮の間にはアフリカとヨーロッパの国々のような差異はなかった。むしろ朝鮮は日本よりも高い文化、文明をもっていた。そういう朝鮮を日本は植民地化したのであるから、それは極めて暴力的なことだった。それに対してヨーロッパの国々とアフリカの間には文化、文明の大きな差があったのではないか。アフリカの植民地化と日本による朝鮮の植民地化とは比べることができない差がある」と主張されたのです。

私はその意見に大変ショックを受けました。私自身は、植民地主義の問題とは世界史的な問題であり、日本が朝鮮を植民地化した19世紀終わりから20世紀にかけての時期

は世界的にみても植民地化が大規模に展開する時期であり、アジアとアフリカの出来事は世界的な同時性の中で議論できるし関連しあっているとも考えていたのですが、日本に植民地化された韓国の人からみれば、そういうふうに見えないというのです。それについて、私は一つには、歴史的な関係についての配慮が足りなかったのかもしれないと感じたのですが、それと同時に韓国の人々がアフリカを「文明化」していないというふうにとらえる視線をもっているのかもしれないとも感じました。このとき、異なる地域の植民地主義の問題を比較することも、ひとつながりの問題としてとらえることも、難しいものだと改めて痛感しました。

実際、東アジアにおける植民地主義の問題とアフリカのそれとの間には大きな違いもあります。最大の違いは歴史的な時間の長さの違いだと思います。今日、クーパー先生が大きな全体像を描いてくださったように、ヨーロッパによる植民地化は500年前に遡るのに対して、日本のアジアに対する植民地化の歴史はほぼ100年ぐらいです。同じ1900年前後に植民地支配に組み込まれた地域のことを考えても、それに先立つ歴史の蓄積の上に立つ植民地主義の問題と、そこで新たに始まった植民地主義の問題には大きな違いがあります。ヨーロッパ史の文脈では、植民地主義の歴史は近代の歴史、「モダン」と括られる時代の歴史の全体にかかわっています。植民地とされた側についてそれを同じ「モダン」という言葉で括るのが適切かどうかはさておくとして、500年前の植民地化の歴史は直接体験した人が現在いるわけではなく、あくまでも継承された歴史、蓄積された歴史として記憶されています。「植民地主義の歴史」「植民地支配の経験」と一括りにするにはあまりに多様で重層的な内容が含まれています。一方、東アジアの場合には、例えば、日本軍によって「慰安婦」にされた女性たちが現在ここにいるという形で、植民地主義の歴史が問題になっています。金友子さんが先ほど自分自身の問題として語られたようなことが生きています。それはまさに「コンテンポラリー」な問題です。そのような蓄積された時間の長さの違いを、比較を行う際には念頭においておく必要があります。どういうことが比較可能で、どういうことが比較可能でないのかを腑分けしながら考えていかなければならないということだと思います。

しかしその一方で、比較ということからさらに一步踏み出して、異なる植民地主義の「関係」に議論を進めていくことが重要ではないかと私自身は考えています。いま、ヨーロッパの植民地となったアフリカなどの場合と東アジアの場合との時間の差異を問題にしましたが、同時に、アフリカなどで1900年前後に非常に暴力的な形の植民地化が一気に進行した事実にも目を向けるとき、そのようなコンテンポラリーな植民地主義が空間

の隔たりにもかかわらず深くかかわっていたことに気づきます。そのかわりとは、一つには学習過程としての植民地主義、ということです。例えば日本の植民地主義と欧米諸国の植民地主義は、征服のための戦争の遂行や統治の方式について、経験を互いに学習し合い、輸入し、輸出し合う関係で構築されていったものでした。日本は日本独自の植民地主義を展開させ、ヨーロッパはヨーロッパ独自のやり方で植民地主義を展開したということでは決してありません。日本が植民地主義者の列に加わった今から100年前の時代というのは、さまざまな技術、情報の伝達手段や交通手段が発達して、いま我々が考える以上に世界が密接につながっていた時代だと思います。当時の植民地主義が互いに情報と経験を共有しながら植民地主義を実践していったのかを見るとき、単に世界の帝国主義の構造というような抽象的なレベルではなく、もっと具体的なレベルで植民地主義が相互に連動していたことを確認することができます。

例えば、植民地時代に植民地官僚とか軍人がそれぞれの帝国の中であちこちを移動するのは普通のことで、それが植民地官僚や軍人の出世のルートであったわけですが、そのような異動＝移動を通じて、支配する側の経験も、支配される側の経験も、信じられないほどの空間を越えて伝えられていきました。例えばフランスの軍人のアンリ・フレという人物は、フランス領西アフリカに赴任し、19世紀終わりの有名なサモリ・トゥーレの大規模な抵抗の鎮圧の総指揮にあたりましたが、彼はアフリカでの任務を終えた後、今度はフランス領のインドシナ（コーチシナ）に移ります。彼がコーチシナにいる1900年に中国で義和団の運動がおり、日本を含む列強8カ国の連合軍が出ていくこととなりますが、フレはその連合軍のフランス部隊を指揮するのです。そこには列強の軍人たちがやってくるだけでなく、その植民地から動員された兵士たちも送り込まれました。イギリスはインド兵を大規模に投入したし、フランスはコーチシナ、トンキンから兵隊を投入しました。つまり、植民地支配下におかれていた人たちが兵士として動員され、北京の制圧へと向かう戦争の中で出会ったのです。その場に日本軍も居合わせた。時はまさに日清戦争と日露戦争の間、朝鮮植民地支配に乗り出した時期です。

これは一つの例に過ぎませんが、植民地支配というのは、各帝国の枠、イギリス帝国とかフランス帝国とかいったものの歴史で完結しているのではなく、相互に交差しながら形成されていったということです。

同じ頃のアフリカに目を向けても、抵抗・反乱を鎮圧する場合に異なる帝国が協力するのはごく普通のことでした。例えば、アフリカ南部では国際政治の構図の上では対立しているイギリス帝国とドイツ帝国がアフリカ人の反乱の鎮圧のために協力しています

し、そこにさらにポルトガルとの協力関係も重なるというような状況があります。そのような意味で、植民地主義の歴史を各国別に類型化して比較するのではなく、むしろそれぞれが互いに学習し合い、浸透し合い、重なり合っている同時代的な関係の中でとらえていくような研究がもっともっと進められるべきだと思います。

そして、そのような支配する側の相互関係と合わせ鏡のように、植民地主義に対する抵抗も帝国の枠を超えて交差していたことを見ていく必要があると思います。一つだけ文献を挙げますと、ベネディクト・アンダーソンの『三つの旗のもとに』という著作は、フィリピンとキューバにおける反植民地主義がアナキズムを媒介にして世界的なネットワークの中で展開されたことに関する研究です。アメリカがフィリピンに対して、植民地という枠の中でネイション・ステイトの原型を押しつけていくのに対して、それに抵抗する側が、そのような枠を軽々と乗り越えトランス・ナショナルな連携をあたりまえのものとして運動していったのは、大変興味深い例です。

以上のような観点に立って、地域を超えた植民地の間にどのようなつながりがあったのかについての歴史実証的な研究を積み上げていくことが、「比較」の研究と並んで重要だと私自身は考えています。そのことは、現在ナショナリズムのぶつかり合いの観を呈している日韓や日中の関係を解きほぐしていく上でも意味があるのではないのでしょうか。

板垣

ありがとうございます。帝国間の比較、植民地間の比較の困難さという問題と、帝国、植民地間の関係性が交差する問題を提示していただきました。

それでは、ここからパネルディスカッションに移りたいと思います。報告者が席を移動していただいている時間を利用して一言。今日は合計4名の報告がありました。第三部の冒頭で何となく輪郭のようなものが見えたとお話しましたが、その点について私見を申し上げます。

クーパーさんの講演の1つのキーワードとして「インター・エンパイア」というものがあつたと思います。日本語では「間帝国」と訳されています。普通「インターナショナル」すなわち「国際的」といえば、ネイションとネイションの間のことを言います。そうではなくて、エンパイアとエンパイアの関係のなかでものごとが動いていく、その歴史性を考えていく概念だつたと思います（その意味では「帝国際的」とも訳せるかもしれませんが）。考えてみますと、その後の3つの発表も「インター・エンパイア」と関係し

ていると思います。車承棋さんの報告では、日本という帝国と、それに対して解放の戦略を提示していたソ連があり、そのあいだにコミンテルンを通じた指導関係がありました。この場合のソ連を帝国と見るかどうかという問題がありますが、ある種のインター・エンパイアの中での関係をみることができるでしょう。黄鎬徳さんの報告は、まさに日本という帝国から脱していった後、米国やソ連との狭間で言語をどのように構築していくか、という問題が提示されていました。金杭さんの報告は、インター・エンパイアのな経験を消去していく過程、戦後日本を構築していくなかでそれを消去していくプロセスが出されていたと思います。

それと同時にインター・エンパイア的なものに対するカウンター、「反抗」「アンチ」についても今日は議論が出てきたと思います。それに関してはコメンテーターの藤井さんが、そこに「社会主義」というキーワードも入れながら整理してくださいました。さらにいえばポスト・インター・エンパイア的な状況をどうみるかということも、4名の報告では出てきたと考えております。このように、クーパーさんの基調講演の視点なかに、今日の議論の枠組みの1つが出てきていたように、私自身は感じています。

この後、報告者別にリプライをしていただこうと思いますが、質問表が圧倒的に金杭さんに集中しておりまして、まずは順番にクーパーさんからリプライしていただき、報告順にご指名の質問も紹介しながら進めていきたいと思っています。

フレデリック・クーパー（翻訳 水谷智）

常に興味深いコメントや質問をくださり、皆様に感謝申し上げます。まず、すべてのペーパーにたいして一括してコメントすることから始めさせてください。我々が皆等しく重要だと考える統一テーマのひとつは、単なる支配の一形態としてではなく、何らかの抗いのかたちとして植民地主義を語るということでした。それはつまり、植民地的そして脱植民地的な状況における運動アクティヴィズムに焦点を合わせるということです。そういった抗いは工場労働に関するものかも知れませんが、言語に関するものかも知れませんが、あるいは第二次大戦敗戦以後の日本の将来像に関するものかも知れませんが、つい先ほど板垣さんがおっしゃったとおり、我々は間インター・エンパイア・帝國的な視座を強調すべきであり、様々な可能性に開かれていた特定の歴史的機会モーメントとの関係においてそれを見ていくべきなのです。

今日のペーパーのうちの二つおよび私自身の研究における第二次大戦後への着眼に鑑みて、将来を想像する可能性がより大きいような特別な機会がある意味存在したと私は考えています。なぜなら、多くの意味において、大戦で敗北を喫したのはすべての大帝

国にいえることであり、日本に限ったことではなかったからです。

間 - 帝國的な状況が根本的に変化したという事実は、諸々の想像的可能性 [imaginary possibilities] を生みだしました。問題は、そうした想像的可能性がどのようにして構築されていったかということです。いつ植民地主義が終わったのか、そもそもそれが本当に終わったのか、さらに、植民地主義という概念が現代の問題を描写するのに有効なのか、といった問いが今日この場で何人かの人々によって発せられました。私は、ここはとても慎重になる必要があると思います。もし、あらゆる種類の不公平、差別、否定的差異化がすべからず「植民地主義」と呼称されるならば、この語はなんら特別な意味を持たなくなってしまいます。そのような極端な方向に振れるのは避けた方がよいでしょう。

一方、植民地主義を語る際に避けられない問題のひとつは、オールタナティブが何かということです。ここでは、植民地主義と脱植民地主義という、近年、^{スカラシップ}学問において広く使われているふたつの言葉のバリエーションを見る必要があると私は思います。これら二つの言葉の相互の関係性を見てみるのです。

「コロニー」(colony) という語は非常に古いものです。確かに、それは地中海世界に固有の語ですが、あるいは日本語や中国語にもそれに相当するものがあるのかも知れません。しかし、「コロ」(colon) という語はギリシャ史、ローマ史の古典からきており、他の場所へ人々を移植することを指します。ギリシャ人はシシリーを獲得し、後にローマ人はそこでギリシャ人のコロニーを見つけました。ローマは複合国家ですが、ローマから実際に人がそこに行って物理的にその人々にとってかわったのです。これは「コロニー」という語の生成を通じて長らく行われてきたことであり、今も続いています。

やがて、「主義」の^{イズム}二文字が「植民地」にくっつけられましたが、それは比較的最近の創作に過ぎません。それは早くても19世紀、大概において20世紀に使われた概念です。そしてそれは、植民地でない状態、いや、帝国でない状態を想像することができてはじめて意味をなすのです。

政治的諸可能性は、多様なかたちを内包すべくその幅を広げており、「国民主権」や「人民が治める政治」などと様々に呼ばれるものが含まれてきています。そしてそこには、我々が「国民国家」と呼びたくなるものも含まれています。しかし、本当に「国民国家」^{ネーション・ステート}という語を使うべきか、我々は慎重であるべきです。なぜなら、国民国家との関係は複雑なものであり、激しい論争的になっているからです。

しかし、植民地主義における「主義」は、その批判者が中心になってくっつけたもの

であり、ほかにそれを率先して使う者がいるとすれば、それは批判者の攻撃からそれを擁護する人々のなかの一部の人々でした。「植民地」にひっつけられた「主義」に関して重要なのは、それが互いに隔てられた^{サブジェクト}主体を生み出すということです。それがあつかないかで、ある種の政治がほかのものから区別されるのです。

それは、我々が定義可能と見なすたった一つの政治のかたちではありません。定義されるのは困難かも知れませんが、それは幾つかの一連の問題を喚起し、正当性にまつわる問題を提起する言葉なのです。ですから、植民地「主義」は、「植民地的でない」(not colonial) 状態が可能であるということを必要とします。植民地主義は批判対象となるものです。しかし、植民地主義を他の種類の政治と区別してしまうこともまた非常に問題含みです。あらゆる独裁が植民地主義的というわけではありません。ファシズムは植民地主義的かも知れませんが、そうでないかも知れません。共産主義は反植民地主義を標榜するかも知れませんが、実際には植民地主義的かも知れません。このように、「植民地主義の政治と他の種類の政治のあいだの」関係は実際には非常に問題を孕んだものなのです。ただここでの私の話のテーマは植民地主義ですので、その政治的内実の有界性 [bounded nature] をはっきりさせたいと思います。

同じことは脱植民地化についてさらにあてはまります。「脱植民地化を試みている」と言うことは、植民地化されてないという状態によってのみ未来のプロジェクトを定義できるといことです。しかしこのことは、藤井たけしさんが最初のコメント「脱植民地化するとは何を意味し、それをするためには何をしなければならないのか」一で提起した問題に他なりません。社会はより公正なものへと変わっていくのかだろうか。そう変わるかも知れないし、あるいは逆にもっと不公正になってしまうかもしれない。第二次大戦後、脱植民地化が議論されていた様々な場所における政治を研究すれば、問題はよりはっきり見えてきます。人々が望んだのは脱植民地化だけではありませんでした。かれらは社会正義、経済発展、繁栄を希求しました。おそらく、学校やヘルスケアも、です。

しかし、脱植民地化について語り出すとき、我々は非常に特殊な種類の政治が終わろうとしていると言ってしまいます。しかしそれが差別に終止符を打つわけでもなければ、特定の人々が文化的に遅れているとか怠惰だとかいう非難をやめさせるわけでもありません。社会正義を奪われていると感じている人々にそれをもたらしわけでもありません。それによって、「有毒な政治形態」というレッテルを貼るのが正当であるような何かを取り除くことはできると思います。ただ、それだけが有毒で有害な政治形態の唯一のもの

というわけではないのです。しかし、独立をしてから、「脱植民地化を果たした」と人は言います。そしてそのことが、人々が抱える文化承認、社会福祉、あるいは正義に関する諸問題に取り組むことの妨げになっているかも知れません。

ですから、私にとっては、ここでの議論における根本的な問題は、植民地主義を名付けると言うことが、それ自体、政治的な行為であるということです。それは単に植民地主義のポリティクスであるだけではありません。それは、「植民地主義が問題である」と言うことのポリティクスなのであり、異常なものは植民地主義であって他のものは正常であり、両者をはっきり分けられるのだ、という非常に疑わしい前提の上になつた政治行為なのです。「よし分かった、植民地主義は悪いことだ、じゃあ取り除こう」、と人は言います。しかし、その後はどうなるのでしょうか？不平等と社会・文化的中傷の問題は無くなってはいないのです。

他にも非常に面白い問題がいくつも提起されていますが、ここでやめておきましょう。あとで、それらに立ち返ることも可能かも知れません。ありがとうございました。

板垣

今日出てきた問題である「コロニー」「コロニアリズム」「コロナイゼーション」に関して、歴史的にどうとらえていくかという観点からお答えいただいたと思います。

次に車承棋さんです。質問を紹介します。質問は車承棋さんと黄鎬徳さんの両方に関わっています。「グラウンド・ゼロにおけるある種の労働運動で、新語における大衆の天才的な方向も、それぞれに植民地主義に抗する特定の主体化の形式といえるだろうが、新語辞典に表れる目的や個別の身体性から離れたもののあり方は近代的主体とどう重なり、どう異なっているのでしょうか。どのような可能性があるのでしょうか？」。

もう一つは富山一郎さんへの質問ですが、車承棋さんに答えてもらうのも悪くないと思いますので振ってみようと思います。「富山さんが支配を語りながら可能性を語る3人の方々と紹介したと思います。具体的にその可能性とはどのようなものでしょうか。また主体の外というのはどういう意味なのでしょう。車承棋さんの紹介部分でおっしゃっていましたが、よくわかりませんでした」。あわせて「可能性」とか「主体の外」について考えておられることがあればお答えいただければと思います。

車承棋（翻訳 西村直登）

植民地主義に関する問題をこれまで議論してきたので、まずは植民地主義をどのよう

にみるのかに関して申し上げ、藤井たけし先生がおっしゃられた社会主義との関係、そして脱植民地主義以降の問題について、私の考えを申し上げます。そして、質問票での質問については、私が答えられる範囲でお答えしたいと思います。

植民地主義とは、端的に言えば、差別を構造化した体制だといえます。これはいかなる形の植民地主義についても同様にいえるでしょうが、日本の場合、戦時体制に移っていきながら、植民地と植民地本国の関係が西洋のような遠距離にある植民地支配とは全く異なる形を帯びようになりますが、私が理解する植民地主義は、何よりも差別を構造化した体制です。

それでは、はたして、この差別が構造化された体制は、どのように持続されたのか、その力は何なのか。植民者の立場では、まず統制と合理性が区別されないようにつくられたため可能だと考えられます。これを「統制的な合理化」と表現することもできるでしょうが、例えば、植民地主義は統制の実現が近代的合理化、すなわち、社会の秩序や制度がつくられる過程と区別されない地点まで一致する体制です。もう一つは、「欲望の内化」と表現できます。すなわち、被植民者のあれこれの不満と憤怒、欲望を植民地帝国体制が含まれる内部へ引き入れるのです。例えば、被植民者、すなわち朝鮮人が朝鮮人であるがために受ける差別を朝鮮人自ら、日本国民になる過程を通して克服するようにつくられること、これが植民地主義を持続させる力であると思います。

最後に、「可視性の絶対化」を挙げることができます。説明しますと、文字化されたり、可視化されたりし得るもののみが現実に存在し、可視化されないものはこの場に存在しないという仮象を作り出されるということでしょう。例えば、地下運動は検挙当局が発表した原稿やこれを伝える言論などのメディアを通して表象される世界、そのように可視化される世界の外には存在しないことのようにつくられる体制が植民地主義だと思います。

ところで、脱植民地、すなわち植民地から自由になったとして、これが克服になったのかといえば、全くそうではありません。本日、クーパー先生も脱植民地主義が必ずしも、国民国家につながるからおっしゃられたでしょう。その間、当然のように、解放以降、北朝鮮と韓国の国家統合の過程を我々は脱植民地過程のように語ってきましたが、私はその点を批判的にもう一度みてみようと思いました。

藤井たけし先生は、解放後とそれ以前、特に1930年代初めの「階級対階級」路線から1930年代半ば以降の人民戦線路線への変化が有している問題点について、興味深い問題提起をしてくださいましたが、例えば、北朝鮮を見る時、今申し上げた植民地主義が持つ

ている、植民地体制を維持させる基本的な構造をはたして、どれほど克服しつつ、社会主義国家をつくってきたのかについても、同じような脈略で質問を投げかけることができるでしょう。

特に、国民国家の形態のなかでは、国家が基本的に政治的決定を独占しますが、韓国はいうまでもなく、北朝鮮さえも、国家を樹立する過程はその時期に存在した多様な可能性と契機を遮断する過程とかみ合わさっています。ある意味では、国家の外部、空間的意味でも時間的意味でも、外部との関係を独占することが国家自体の特徴であるともいえるでしょう。

特に韓国においても、北朝鮮に対して知ろうとしたり、北朝鮮に関する情報を得るツールは、国家情報院や軍の情報機関が独占しています。北朝鮮においても、国家がつくれる過程は外部との連結通路を断ち切る過程でありました。言い換えれば、宗派闘争という名前で理念間の対立という意味の意向をとりながら、ソ連や中国、あるいは植民地時代に朝鮮で社会主義運動を続けてきた彼らを肅清する作業を経てきたのです。

非常に不明確でぼんやりとしています。このような外部を探してみようという考えから、私は比喩的に「グラウンド・ゼロ」や「アンダーグラウンド」という表現を用いました。

最後に、質問票でご質問してくださった方にお答えをいたします。「アンダーグラウンド」の存在が近代的な主体とどのように似ており、異なるのかについて質問していただきましたが、実際の近代的主体という概念が有しているイデオロギーがとても強いため、私も「近代」というよりかは「主体」という用語を可能な限り、避けようとしてきました。近代的主体の範疇に含まれるのか、含まれないのかをはっきりとさせることはできませんが、彼らはとにかく、そこに存在していました。そこにいた存在が今まで我々が知っている近代的主体という一般的な規範として説明されてこなかったということだけは間違いないように思います。

例えば、発表文でも興南工場の朝鮮人労働者たちにとって労働規律が不在だという点を取り上げましたが、日本人幹部や労働者たちが朝鮮人労働者に対して、典型的に発した言葉が、怠惰だ、責任感がない、向上心がない、自分自身を成長させようとする気持ちがないといったものです。このことでもって、「どうしようもない人間」という印象が強固になりました。

ところで、このようなステレオタイプ的な言説〔言説〕は、あいにく、1990年代半ば以降の若い「労働者」に対して、よく使われたりした既成世代〔現在の社会を引っ張っ

ている世代、1990年代から2000年代前半においては団塊世代]のレトリックと似ています。それはおそらく、近代的労働規律が身体に刻印されたこれらが新しい労働形態に対して見せる反応の一面であるともいえるでしょう。フリーターについて、怠惰だとか、向上心がないとか、規律がないという言葉をしばしば耳にします。日本でも韓国でもこのような形の労働人口が増えております。韓国の一部の社会学者は、これらを「余剰人間」、すなわち競争から脱落していった存在ではなく、最初から競争に参加する機会さえ排除された存在であるという意味で、「余剰人間」だと呼称したりします。

しかし、私はこの余剰が単に排除された存在であるのみならず、発表文でも論じようとしたように、裏返してみると、実際には統治可能性の範囲外にある、統治可能性を超越した存在ではないかという気がします。これをどのような形の主体化と命名することができるのかどうかはよく分かりませんが、統治可能性を超越した存在を見ながら、そこから、今まで我々がよく知っている歴史的な概念を通して見たものとは別の形の新しいつながり、結合関係を探してみようと思いました。

以上です。

板垣

植民地主義というものを差別の構造としてどうとらえるかという問題、またある種の統治可能性を超越した主体性のあり方も出てきたと思います。

次に黄鎬徳さんよろしくお願いします。

黄鎬徳

ご指摘、ありがとうございます。質問は、大体四つあったと思います。藤井さんから歴史的な経験としての社会主義とその言語的再活性化をどう考えるか。また、ある場所や言語の「回復」とか「光復」といった概念では、絶対とられない企画としての脱殖民、いわば解放後のビジョンや展望を含めた、「未来への企投」としての「解放」の意味に関する質問がありました。また、これも藤井さんからの質問でしたが、帝国日本と植民地朝鮮に関する私の最近の本(『虫と帝国』)に描かれた「帝国対虫」といった構図が解放期朝鮮で「群れ・集団・共同体」として如何に移行したか、という問いがあったと思います。

それから、金友子さんからの質問ですが、かなり微妙で複雑な質問だったと思います。理念と現実または政治と肉体の狭間にある「ウリマル」(韓国語:「私たちの言葉」)の複

雑性を金さん自身の経験から問いながら、言語の肉体性に関してのお話があったかと思っています。言語現象におけるハイブリッド化、さまざまな新語や新しい言葉と関わった政治空間、言語の政治性に対する話は、理解できるものだが、本質的な自己構築、例えば取り戻した「ウリマル」を通して現前する肉体やアイデンティティの問題をもっと考えるべきではないか、という質問だったと思います。簡単にいえば、「解放」期に問題になったのは「ウリ」(我ら)の同一性をどう取り戻すか、あるいはどう作るかということであったかと思っています。具体的には日本語世代、地域的な他者、在日朝鮮人や引き揚げた帰還者の問題などは意識的に無視されたかも知れません。

たとえ、取り戻したその「ウリマル」をも、肉体の言葉としてはとても考えられない世代、存在(例えば「在日」)も、たしかにあった、いや、まだまだあると思います。「私たちの言葉」(ウリマル)が我が言葉、いや私の肉体の言葉と破裂している存在に関する問いは、非常に大事なご指摘として受け入れるべきだと思います。特に母語と母国語の間にある深淵、また肉体の言葉とアイデンティティを求める言葉の両方から違和感を感じる存在といった問題は、これからもっと本格的に考えるべき問題であると思います。

それから、私の発表だけに限られてる質問ではないですが、三つ目はクーバーさんからのコロニアリズムと帝国の問題をどうみるか。または最後に質問表の、近代的な主体ということ、今日、プレゼンテーションした新語辞典からどう考えたら如何なるものになるかという質問があったと思います。

エンパイアとコロニアリズムは語源的にもローマ時代から、もっと遡ることもできて、同じ概念ではないが、東アジアにおいても似ている概念が使われたこともあります。その普遍性はそれなりの検討が必要とは思いますが。ただコロニアリズムの概念をあまり広く考えてしまうと、もともと資本主義における資本の運動や循環、その中で経済的な関係によって成り立つコロニーが、ある意味では経済的な関係、資本主義との関係を失ってしまう可能性があるのではないかと思います。

もちろん、クーバーさんの指摘というのは、基本的に否定的な概念としてのコロニアリズムという言葉、いかに新しく解析し、いまここでどう受け止めたらいいか、そういう問いが提出されたと思います。その問いを私はコロニアリズムをもっと脱構築的な概念として、最初から考え直し、その概念のコンテクストをみようという訴えとして受け取りたいと思います。韓国においても藤井さんのコメントにもありましたが、コロニアリズムは何かに関するある図式があったと思います。最初はファシズム、全体主義、国家主義の枠組みとか差別とかの話がされましたが、解放される直前、語られたのは相互

関係なんですね。いわば、植民地末期における公民権の問題です。そのなか、帝国と植民地の対立が全部ではない、これは支配装置、関係のテクノロジーとして存在しているといった観念が出できます。朝鮮人だといって、植民地が楽な人間、階級もあるわけだから。植民地主義が世界資本主義の中で動く、ハイクラスのインタレストを維持する、あるシステムで見えてしまう。その中で植民地主義は、ただ日本と韓国の問題ではなく、世界的にブルジョワ階級を維持するための装置としてコロニアリズムがあるという枠組みが、解放期に定義されたと思います。「親日派」というのも、結局それですね。また、そのテクノロジーによって様々な分割線や差別が解放のあとにも残存するわけです。また、それがあつた時期、韓国国家主義の起源になったり、ブルドーザー式のハイ・モダニズムの始まりになったり、植民地近代性の話になったりする。ポスト・コロニアリズムだけではなく、コロニアリズムも、ある意味で最初から脱構築的な、今、何かからの脱かという社会的な議題によって変わってしまうことも考える必要があるのかなと思います。その中で基本的には経済的な概念であることは忘れてはいけないことだと思います。

最後に今までの植民地主義に関する勉強と今回の発表の関係性に関する藤井さんの質問にお答えしたいと思います。植民地末期における虫という単独性から解放期における群れという共同体への移行を如何に考えるべきかという質問だったと思います。確かに藤井さんのコメントは正しいと思いますが、僕が植民地主義や植民地の「後」の話に移ったというよりは、その問題性の延長していると考えたらどうでしょうか。帝国と虫というのは、可能性が非常に限られている時期において、ある意味では主権権力だけがすべてを決定するようになる時期においても、その動き、運動の中で肉体または民衆の言語はなにかを話している。しかも、それが「言葉」というより、叫び声、悲鳴のような、ある意味では可能性としてではなく、否定的な意味で人間が問われるというモーメントとして存在していた、という意味で「虫」の叫び声という言葉を使ったわけです。しかし、その叫び声というのは、決してその時代だけの話ではありません。話す人間のある限界条件、または言語の限界概念としてそれがあつたと思っています。それは、金友子さんからのご指摘ともつながりますが、肉体的な言葉が共同体、公論場、政治の空間と破裂するとき、人間の言葉は単なる声、叫びになってしまいます。問題はその叫び声を「聞く」ことによって政治自体、人間自体を問うことができるということです。

今回の発表が解放された後、新語辞典とかの話になつたのは、こういう時の言語は基本的に理念や戦術を意味する名詞によって成り立つ結社、党といった集団的な言葉に見えますが、それにはその虫たちの声、虫だつたはずの存在の熱望が「叫び」というより

「口号」や掛け声として現われるからです。これは企画としての解放や脱植民地、独立のブレーンという概念ともつながっているわけです。集団的な名詞というのは、悲鳴の反対側にあるように見えるがそうではない。新語に現われる政治的な動物の話、その概念を設定することによって、それを生きる存在、話す存在として人間、民衆でもあり、大衆でもある存在の意味が、虫の低層から微かに見えるのではないかという考えでした。概念を決定するのは、金起林の話のように、大衆、ある意味天才的とはいえない、大衆の叫び声であると思います。

ソビエトの話で外国からの記者を集めて発表した声明の中で、朝鮮共産党の指導者だった朴憲永は「あなたはあなたの祖国がソビエトに入ることにどう思いますか?」といわれた。英語で。すると「賛成だ」というんです。そのソビエトは国家じゃないですよ。あれが解放期に、ある意味では共産党が建設的なヘゲモニーを失う、あるモーメントだったんです。解放された後の話になると第2次世界大戦の後には、第三世界においてはソーシャリズムとナショナリズムの中でいろんなバリエーションがあるわけで、その中でバナキュラー・コミニズムのようなものも成り立つことができたわけです。それに失敗したのが朝鮮共産党でしたね。分節された言葉、抽象名詞だらけの新語では、絶対とられない大衆の熱望や生、また「言葉の場」を金起林は言っていたはずなんです。

金友子さんからの質問は本質的な自己構築の可能性について。その中でも問題になるのは本質とエッセンシャルティとは何か。確かに在日の方がウリマルということをする時に、その中で設定するウリは、何かに対する問い—民族や在日自体—とかぶってしまっていると思うんです。その中で、ウリは私の発表の中では、その時のウリは闘いの対象だったんですね。ウリが民族的なニュアンスをもっているか、新しい社会に対するビジョン、展望にかかわっているかによって、ウリマルに対する論争が行いました。新語か、セマル（新しい言葉）か、漢字かハグルか、いろんなバリエーションがあって、その意味ではウリマルは安定されている概念ではないということです。ご指摘、感謝いたします。原稿完成において、参考にしたいと思います。

板垣

最後に金杭さんです。金友子さんのコメントにもありましたが、冒頭でおっしゃった植民地主義とは何かという部分に関する質問があります。「冒頭で植民地主義は国民国家において法が宙づりにさせられた状況と定義し、法そのものを脱構築することが植民地

主義の批判につながると述べられました。しかし植民地主義を言葉や概念の問題に帰することは実際に行われた反植民地主義運動や平等化することにつながらないでしょうか。特にアフリカなど、あえて近代化が行われなかった文脈でのアプローチで論じることが妥当なのでしょうか?」。クーバーさんのおつれあいのジェーン・バーバンクさんからも同趣旨の質問が来ております。

もう一つは違う観点からの質問で、今日の日本の状況にかかわるもの。「丸山真男の規範への追求への根本的な批判として、生、現実の重要性を主張した小林秀雄の論理は現在の日本社会における反韓、反朝鮮という実像のないものに、ほんやりしたことへの批判に似ていると感じました。このような根拠のない批判が、なぜ生まれ、またこのような批判の問題を克服するためにはどうすればよいのでしょうか?」。これもあわせてお答えいただきたいと思います。

金杭

冒頭に乱暴な議論をおいたのですが、そこにぎこちなさ、引っ掛かりを感じられた方々が多いと思います。植民地問題を「民族の支配を抜きに考えられるのか?」という場合に「民族同士のある支配関係に還元されることのできない部分が、コロニアリズムにはある」という趣旨でしたが、そこが乱暴な議論になってしまいました。真意は還元されない部分をどうやって還元してきたのかを問題にすべきだと言うことで、藤井さんもクーバーさんもいわれたとおり、植民地支配から解放された後に何を企てるのかという問題設定から考えるべきだと思います。ここで未来への問いと民族集団の構成の仕方が関係してくる。民族と植民地主義を考える場合は固定された国民国家を前提することではなく、デ・コロナイゼーションの真っ只中で、未来に投射された民族の像と植民地をどうやって考えていくかを考えるべきではないかと思います。その意味で藤井さん、クーバーさん、金友子さんのコメントは僕にも勉強になりました。ありがとうございます。

次に植民地主義と法の関係。これに関して理論的な話をすればキリがないのですが、僕は思想を扱う人間なので、言葉や概念の問題に還元しがちです。最近、フーコーとかアガンベンがいつているビオポリティークという概念が流行りました。それはイマジネーションを活性化する役割を果たしたと思いますが、その話は字義どおりに受け取るべきだと思います。まさにむき出しの生をあまり概念的に受け取らないで字義どおりに受け取る必要があると思います。人間と動物、人間と獣の区別がほとんど消されるような経験を植民地主義の中でちゃんと拾っていかないといけない。概念的に植民地主義の状況

を把握するのではなく、むき出しの生、生成時における獸的な生の形を字義どおりに、どうやって我々の言語でとらえられるのかという問いで受け取るべきだと思います。

そういう意味で植民地主義が、法が宙づりにされるといった意味は、ある意味、抽象的に聞こえると思いますが、僕は明確なイメージをもって、それが植民地主義的なものに対する研究、思考に与えてくれるのは、植民地主義というのはプリミティブな形だということなんです。近代の植民地主義というものから近代の歴史学的な時間軸をとると、ずっと古代から近代まで進歩してきたという観念があるんですが、僕はそうじゃなくて近代の植民地主義といった場合にも植民地主義の中で法が宙づりにされるというのは非常にプリミティブな支配の形、暴力の形がむき出しになる、こういうふうに簡明にとらえる観点も必要なのではないかと。それをもっと人文学の学知において概念を申し上げますと、進歩という概念を、そろそろ廃棄すべきではないかと。ラディカルにいうと、進歩という概念は、ある意味、科学技術的な概念の中での歴史で考えた場合は、手で押す車がガソリンで、ハイブリッドでということ進歩というかもしれないですけど、人間の統治に関する限りは、そんなに人間変わっていませんよ、ということをおっしゃるのではないかと。そこを申し上げたかったんです。

あと僕は丸山真男と小林秀雄の例を申し上げたわけは、植民地主義でいうと丸山という人は規範で日本を語ったということは、今の日本がどうあるべきかという、時間的にいうと未来へ投射して考える。小林は事実は過ぎ去ったもので変化は不可能だ。絶対に人の手がそこに加えられない何かだとか。過ぎ去ったものは、過去に投影して現在を語っているんですね。僕はこれこそが、まさに植民地主義のものの考え方の典型だと思います。それは何か。現在を現在の言葉で語れない。語ることを禁止する仕方の議論の構成の仕方だと思います。

現在のことを現在の時点で現在の言葉で語ることを遮る、これは、最近の日本におけるコリア・パッシングの問題ともつながると思います。未来と過去に対する態度からなる、ある種の根強い植民地主義的な見方が、現在のコリア・パッシングという状況を未来か過去に投影して発言させ、かつ根強い思考の仕方を今、強いているのではないかと思います。

板垣

まだまだお話ししたいのですが、このへんで切らなければいけなくなっています。最後に富山さんにまとめていただきたいと思います。

富山

話したいことはいっぱいあるのですが、時間がほとんどないので、最低限のことだけ話します。先ほどの発言の中でクーパーさんが植民地主義を支配の形態ではなく、抗いの形として語ることを、すなわち植民地状況を脱植民地化の可能性として語ることを、今日のシンポジウムの全体のテーマとして抽出されました。それは藤井たけしさんが、未来への投機としての脱植民地化とおっしゃったことと、あるいは金友子さんが継続する植民地主義という言い方で現在の状況を表現されたことと深く関連します。いまだ克服されない植民地主義という設定は、未来への投企が継続中であるということでもあるのです。重要なのは、この投企の継続なのです。

こうした現実への密着と現実批判の可能性を同時に確保するような議論が、まさしく今日の「植民地主義のなかの帝国」というテーマにおいて求められていたものであり、四つの報告や第三部の議論も、こうした文脈において見事に議論が展開したと思います。そして私には今日の議論は極めて希有な出来事のように思えます。

永原陽子さんは、比較ということに関連して、複数の帝国が重なり合い、あるいは帝国が連累していくところに植民地主義を設定されました。また同時に脱植民地化のプロジェクトもまた、ナショナリズム、アナーキズムなどの重なりの中で、帝国をそして国民国家を横断していくということも指摘されました。それは逆にいえば、これまでの帝国や植民地主義そして脱植民地化のプロジェクトがいかに時間と空間により分けられ、秩序づけられて理解されてきたかという証左でもあります。植民地主義の後に、脱植民地化がはじまるのでしょうか。あるいは藤井さんが指摘されたように、第三世界は地理学的に分けられた場所ではありません。私たちは「植民地主義のなかの帝国」という設定で、新しい諸研究テーマを標榜したかったのではなく、これまでの植民地主義と帝国にかかわる知の前提を根底から、そして慎重に再検討していくことを示したかったのです。

またそうした植民地主義を考え、語り、その中にいまだに継続する可能性、未完の投企を確保し続ける作業において、私は、とりあえず違和や痛みとしかいいようのない身体感覚や感情の領域が極めて重要になると考えます。金友子さんが日本語を使うことの「情けなさ」と「楽しさ」を語られました。私はそこに継続する植民地主義と同時に、未完の投機の、すなわちまだおわっていないのだという未来への可能性の端緒を感じました。

もう全く時間がないのでここでやめますが、やはり植民地主義を今の問題として考え続けることにかかわって、まさしく現在の日本の状況に言及しておく必要が、やはり

あります。最後に金杭さんが言及されたことも関係しますが、路上において現出している排外主義や、安倍政権による憲法の崩壊は、単なる右傾化ということではないと考えます。すなわち帝国日本の戦後ということそれ自体が、今問われているのであり、いいかえれば脱植民地化を継続すべき可能性として、今こそ語らなければならないのではないかと考えています。

そんなことを考えながら、この後、アーモスト館で懇親会を予定しています。ぜひ、話し足りない方は参加してください。院生をはじめ多くの人たちが、手作りで素敵なパーティを準備してくださいました。最後に本日の報告をしていただいたフレデリック・クーパーさん、車承棋さん、黄鎬徳さん、金杭さん、発言者の藤井たけしさん、金友子さん、永原陽子さんにもう一度大きな拍手をお願いします。また会場を準備していただいた人文研のスタッフの皆さん、論文の翻訳をされた西村直登さん、沈正明さん、懇親会の準備をしていただいた大学院生の皆さん、通訳を担当していただいた同時通訳の皆さん、本当にどうもありがとうございました。